

なんだろう、あれは。

ごく淡い、青みがかったモノクロの模様。まだらに曇った窓ガラスのような。

そう遠くないところにある。手を伸ばして届く距離ではないが、三メートルと離れていない

思い出す。

あれは、天井だ。私の部屋の。

モノクロの模様は、街灯の光がカーテンの上の隙間から漏れ、天井に映ったものだ。

そうして私は、ベッドの上にいる自分に気がついた。

こんな真夜中に目が覚めた理由は、すぐにわかった。

体じゅうが、痺れたような冷たいような、嫌な感じになっている。

心臓が胸のなかで暴れて、脈拍の一つ一つが、破裂しそうなほど激しい。

悪い夢をみたに違いなかった。

夢をみた記憶はない。きっと、覚えていることもできないくらい悪い夢だったのだろう。

動悸が静まるのを待って、ベッドサイドの明かりをつける。時計の針は午前一時を指していた。

私はベッドから降りて、カーディガンをはおり、廊下に出た。廊下といってもほんの四歩で玄関に着く。狭いマンションなのだ。

玄関からそつと外に出て、階段を昇る。一階上、私の家の真上にある家のドアを開ける。もちろん鍵を使って。

中に入っても明かりはつけない。自分の家と同じくらい、この家のことはよく知っている。手探りだけで用は足りる。それにめざす部屋まではほんの四歩だ。

部屋に忍びこみ、薄暗がりのなかで、目を凝らす。

セミダブルのベッドの上に、ぽつんと小さく横になっている。身体を丸め、壁を向いて眠っている。美樹の寝相だ。

胸が、幸せな温度になる。美樹の温度。

カーディガンを脱いで椅子の背に掛けてから、できれば美樹の目を覚まさないようにと、そつとベッドに潜り込む。けれど無駄な努力だった。

「菜摘？」

たった今まで眠っていたとは思えないような、はっきりした声。

「ええ」

美樹は寝返りをうつてこちらを向き、私の頭をなでて、言う。

「おやすみなさい」

このベッドはセミダブルで、二人で寝てもあまり狭くない。狭くないどころか、私には広すぎる。広すぎて、美樹にあまり近づけない。

肩が触れるくらい狭ければいい。抱きあってもおかしくないくらい狭ければ、もっといい。

「おやすみなさい」

わざと冷たい機械的な声で言う。

美樹の手が、私の頭をまたなでる。わかってる、と言いたげに。わかってない。

壊れてしまいたいほど、待ち望んでいるのに。

肩に手をかけてほしい。引き寄せてほしい。そうして、美樹に近づくことを許してほしい。

けれど私はこの思いを伝えることさえ許されていない。

憎しみが湧いて、胸を焼く。

これも美樹の温度だ。

*

四年前の夏、東京郊外の林のなかで、若い男の変死体が見つかった。

殺したのは美樹だ。

殺させたのは、私だ。

私の父の実家は、東京郊外の、あまり開発が進んでいないところにある。私の家からはバスで二十分ほどかかる。お盆や年末にはいつも日帰りで帰省する。

小学五年の夏もそうだった。ただ、いつもと違っていたのは、帰る前に近くの河原で花火をしたことだった。

どうして花火をすることになったのかはよくわからない。私はべつに花火をしたいと言ったおぼえはないのに、どうしても、私が言い出したということになっていた。こういうのはよくあることだったし、花火をするのは嫌ではなかった。私はなにも言わなかった。

そのころの私は、ある腕時計が大のお気に入りだった。一見、薄汚れた安物のアナログで、しかも時計バンドがなかった。もしあっても、当時の私の腕には大きすぎただろう。男物だったのだ。

その腕時計に私が惹きつけられたのは、黒い文字盤の上の、ほんの小さなマークのためだった。放射能マーク。

母に連れられて来ていたアメ横で、手持ちぶたさにショーウィンドウを覗いて、このマークを見つけた。その瞬間、私は全財産をはたくことに決めた。その腕時計は時計バンドもない中古の安物のくせに、ぎよっとするほど高かった。お年玉にあまり手をつけていなかったのが幸いだった。

放射能マークを手に入れた私は、なんだかとても強くなったような気がした。もしかすると『ゴジラ』でも観ていたのかもしれない。そのとき美樹は中学一年だった。美樹は、私になにかを自慢しても、それをけなすようなことは絶対にしなかった。だから私はまさきに美樹に見せた。

放射能マークを見て美樹は、本気で感心していた。

「でも、これってどういう意味なのかな」

美樹は訊くともなしに言った。

「知らない」

「…あ、ひよつとして」

「なに？」

「これ、夜まであたしに預けてみない？　きつと面白いものを見せてあげる」

「うーん…」

手に入れたばかりの放射能マークとずっと一緒にいたい。けれど、美樹の口ぶりだと、『面白いもの』というのは放射能マークと関係があるらしい。

結局、美樹に腕時計を預けて、夜を待った。

八時過ぎに美樹のところに行った。「いま見せてあげる」と言いながら美樹はカーテンを閉め、明かりを消し、部屋をほとんど真っ暗にした。机の引き出しから腕時計と目覚まし時計を出して、すばやく毛布の下に入れた。

美樹は毛布に頭を突っこんで、

「ほら、こうやって見るの」

私も同じようにした。すると、闇のなかに小さな緑の光がいくつも見えた。腕時計の夜光塗料の光だった。

「知ってる。夜光塗料じゃない」

べつに珍しくないと思った。アナログの目覚まし時計はみんなこうして光る。

美樹は四角いものを私の手にあてた。さっきの目覚まし時計らしい。

「この時計、光ってる？」

「光ってない」

美樹は毛布から頭を出して、ベッドサイドの電灯をつけた。数秒間、目覚ましに電灯の光を浴びせて、毛布の下に戻し、電灯を消した。

「これでもう一回見てみるの」

さっきと同じように毛布のなかに頭を突っこんだ。

目覚まし時計の文字盤が、鮮やかに光っていた。

「あれ？」

「さっき夜光塗料って言ってたけど、本当の夜光塗料なんて今はめったに使われないの。そのかわりにみんな蓄光塗料っていうのを使ってるの。」

蓄光塗料っていうのは、まわりが明るいときに光を貯えて、暗くなると貯えてた光を出す、っていう仕組みで光るんだけど、これだと貯えてた光を使い切ったらもう光らない。

本当の夜光塗料っていうのはそんなのじゃなくて、光が当たると関係なしに光るの。どうやって光るのかっていうと、放射能で光るの」

それからあとの説明は私には難しすぎた。放射能で光る、珍しい腕時計だとわかっただけで、私はとても幸せだった。

そんな素晴らしい腕時計だったので、私はどこへ行くにも持ち歩いていた。なくさないように、時計バンドをつける金具に布きれを通し、その布きれを細い鎖に通して、首にかけていた。アクセサリーとしてはちょっと個性的すぎたので、たいてい服の下に入れていた。

もちろん、父の実家に行ったときにも、そうやって持っていた。

この腕時計で悲しかったのは、夜光塗料があまり光らない、ということだった。本当の真つ暗闇でないととも光って見えない。

だから、ちよつと暗いところに来ると、すぐに腕時計を服の下から出して、文字盤をためつすがめつした。花火の合間にもしよちゅうそうしていた。

腕時計をなくしたのに気がついたのは、翌日の朝だった。私はまず美樹に相談した。美樹は、私の昨日の行動のことを順々に訊いてゆき、自然に答えを導き出した。おそらくあの河原が、でなければその帰り道で落とした、というのが答えだった。

私はすぐに行つて探すことにした。「菜摘ひとりじゃ危ないから、あたしもついてく」という美樹と一緒に。

私も美樹も、機嫌が悪かった。貴重なおこづかいと夏休みの時間が、こんなことに削られるのだから、虫のいどころが悪くなるのは当然で、しかもその日は煮えるように暑かった。

バスの通る道路から、河原へ通じる、林のなかの細い道に入ったところで、お互いの忍耐が途切れた。

「誰がついてきてほしいなんて言つた？ あたし言つてないね」

「止めたつてきかなかつたでしょ？！ だつたらついてくるしかないじゃない」

「うるさい」

「……！ …菜摘みたいな心配したあたしが馬鹿だったわ。帰る」

「帰つて」

私は振り向きもしなかった。

それから五分ほどして、向こうから人が歩いてくるのが見えた。二十歳くらいで、背が高く、筋肉質のがっちりとした体格だった。顔はわからない。記憶から抜け落ちたのだろうか。

すれちがおうとしたとき、男が言った。

「お嬢ちゃん、ひとり？」

なんの意図も感じられない、なにを考えているのかわからない声だった。

この男は危険だ、と直感的に思った。

何か重いものが動く気配がした。気配がした、と思ったとき、頭の横のほうが発火した。

殴られたのだ、とわかるまで、信じられないほど時間がかかった。身を縛るものはなにもないのに、私の手も足も、まったく思うように動かなかった。私はバラバラだった。全身のネジを一つ残らず抜かれたロボットのようだった。

私の体はどうやら、草の生えた緩い斜面を引きずり降ろされているらしかった。やがて、ちよつとした窪みに落とされて、そこで止まった。

逃げる。

戦え。

私の体の一部が命令を叫んだ。その命令はちつとも、どこにも伝わらなかった。それでも叫びは続いた。逃げる。戦え。逃げる。戦え。逃げる。戦え。逃げる。戦え。

男の腕がなんのためらいもなくこちらへと伸びる。

なにかがぶつかつた音がした。

TVの効果音にしたいような、妙にユーモラスな音だった。

男の体が、積みあげた荷物を崩したように、ぼろっ、と地面に倒れ伏した。

「菜摘！」

その声を聞き、美樹の真っ青になった顔を見て、私はゆっくりと絶望していった。

これは現実なのだ、と。

私はやつとのこととで立ち上がり、美樹に支えられながらその場を去った。歩き出すまでの数十秒間、男はぴくりとも動かなかった。それでも美樹は私をせかした。

林を出るころにはどうにか一人で歩けるようになった。服の汚れは、払い落とせば目につかない程度だったし、殴られた跡も、髪は

毛の下にあるので外からは見えなかった。

家に帰るバスは、乗り換えなしで家の近くまで行ける。けれど美樹は、ＪＲの駅前のバス停に近づいたとき、「次で降りるよ」と言っていた。理由は言わなかったし、私も訊かなかった。警察の捜査を少しでも難しくするため、以外にありえない。

家にたどり着いたときには、まだ午後になったばかりだった。

平日の昼間は、私の家には誰もいない。美樹の家もそうだ。私は一人っ子で、両親とも働いている。美樹の両親は離婚していて、仕事の忙しい父親と二人暮らしだ。

自分の部屋に入ると、人心地がついた。と同時に、全身から力が抜けて、あやうく倒れそうになった。

「大丈夫！？ 頭痛がする？ 吐き気は？」

支えようとする美樹の腕を握って、私は言った。

「大丈夫。ほっとして力が抜けただけ。病院なんか行かない」

行けば、警察は難なく私のことをつきとめ、美樹を捕まえるにちがいない。

「…… やっぱり、」

その先は言わせなかった。

「捕まっちゃだめ。」

絶対許さない、そんなの。

捕まったら許さない。一生許さない」

しばらく、その場に立ったまま、二人とも黙っていた。

「病院くらい自分で行ける。美樹は気にしないでいい」

「…座って話しましょう」

美樹の言うとおりに、私は絨毯敷きの床に腰を降ろした。向かいあつて美樹が座った。正座だった。

「菜摘、少しでも具合が悪くなったら病院に行くって約束して。」

そうしたら、私は捕まらない、って約束する」

「絶対捕まらない？」

「絶対」

「約束する」

美樹は、かなり長いあいだ、不思議な表情で私を見つめていた。悲しんでいるような、喜んでいるような、祈っているような。

「捕まらないように努力してくるわね」
そう言って美樹は出ていった。

美樹がなにをしたのか、私は知らない。

翌日、あの林から、他殺とみられる変死体が発見された。死体は、
M証券の常務取締役の長男だった。

それだけを知らせたあと、報道はふつつりと途絶えた。